

## 展示資料目録

### I. 甲 冑

1. 浅葱糸威 錆色塗切付札二枚胴具足（県指定文化財）
2. 本小札紺糸威胴丸（県指定文化財）
3. 素懸紫糸威朱塗五枚胴具足
4. 色々威赤塗金泊押二枚胴具足
5. 黒塗二枚胴色々威具足
6. 黒塗浅黄糸威腹巻

### II. 馬 具

1. 馬具一揃

### III. 陣羽織・胴着

1. 陣羽織
2. 陣羽織
3. 陣羽織
4. 陣羽織
5. 陣中胴着

### IV. 屏 風

1. 龍の図
2. 虎の図
3. 江戸城および大名屋敷割図
4. 最上川川筋の図

### V. 鉄 砲

1. 30 匁筒
2. 20 匁筒
3. 10 匁筒
4. 3 匁筒
5. 3 匁筒
6. 5 条線銃
7. スペンサー銃
8. 火縄短筒
9. 短刀型短筒
10. 火 繩
11. 玉 型
12. 鉄 皿
13. 薬 合

### VI. 刀・槍・なぎなた

1. 刀
2. 刀
3. 刀
4. 短 刀
5. 短 刀
6. 衛 府 太 刀
7. 槍
8. 槍
9. 槍
10. 槍
11. 槍
12. 槍
13. 槍
14. 槍
15. 槍
16. 槍
17. 槍
18. 槍（くだ槍）
19. なぎなた

### VII. 旗

1. 龍の字旗
2. 毘の字旗
3. 紺地日の丸旗
4. 刀八毘沙門旗
5. 白地日の丸旗
6. 戊辰戦争東北連合軍旗
7. 赤地菊花御紋旗

### VIII. 笠 類

1. 高野山笠・刀
2. 御野 凧 笠
3. 白毛しやくま
4. 平 笠

### IX. 絵 図

1. 米沢城下町絵図（文化8年）

1975. 7. 6(日)～ 7. 20(日)

— < 特別展 > —

## 宮坂コレクション展

山形県立博物館

### 開催にあたって

宮坂コレクション展は、故宮坂善助氏が収集された考古・歴史資料のうち、甲冑・刀槍・陣羽織旗・鉄砲などを展示して、米沢藩の文化の特色を考えてみようとするものである。この開催については、宮坂考古館のご協力をはじめ、多くの方々のご助力を仰いだ。また、解説については、とくに県文化財専門委員佐藤東一先生のご指導を仰いだ。記して深く謝意を表したい。

## 宮坂考古館について

米沢市東1丁目宮坂考古館は、故宮坂善助氏が80余才の生涯をかけて収集された約700点の貴重な資料を収蔵している施設である。その大部分は米沢・置賜地方の考古・歴史・民俗資料であるが、大別すると甲冑56点・鉄砲39点・同附属品10点・薬合13点・屏風14点・笠類38点・馬具18点・旗類24点・陣羽織・着物31点・瀬戸物47点・書画57点・刀槍・鏢80点・塗物31点・書籍75点・考古資料110点・軍塚仏像等58点をかぞえる。その中には、県指定文化財の甲冑5領をはじめ、鉄砲・槍・屏風など米沢藩関係の重要な文化財がふくまれている。

宮坂氏は若くから郷土の歴史の研究に従い、地域の隅々まで足をはこんで考古資料の調査・収集を行なったが、戦後はとくに旧藩関係の資料の散逸するのを惜しみ、その収集・保存に力を尽された。

かくして収集された資料を広く人々に公開し、地域文化の向上を期するために、昭和37年12月に私設博物館宮坂考古館を開設した。この後、さらに内容を充実し、昭和48年3月には財団法人宮坂考古館と組織を改めた。

宮坂善助氏は、また米沢藩の特色ある砲術を古式により復活し、その隊長として活躍された方でもある。

## 上杉藩について

藩祖上杉謙信は、越後の守護代長尾氏の子として享祿3年(1530)春日山城に生れた。19才のとき 家をつぎ、四隣に武威を輝かし、永祿4年(1561)には、信州川中島で武田信玄と戦った。その後織田信長と覇を争おうとしたが、出陣の真際に急死した。(1578)

あとを継いだ景勝は、豊臣秀吉に従い、天正18年(1590)の小田原征伐などに武功をたて、慶長3年(1598)には、会津120万石を領するに至った。同時に重臣直江兼統は米沢城に入って30万石を賜わり、置賜地方の経営にあたった。

しかし、天下分目の戦いにおいて、景勝は大坂方に味方したために領地を削られ、伊達・信夫・置賜30万石となり、会津から米沢城に移された(慶長6年)。

かくして米沢藩政が展開されたが、寛文4年(1664)、4代綱勝が急死し、世継ぎがなかったために断絶すべきところ、保科正之のはからいにより、吉良義央の長子三郎をたて、5代藩主とした。

しかし領地は半減されて、置賜地方15万石となった。

この後、米沢藩は次第に財政難に陥るが、これをみごとに再建したのは、10代治憲(鴈山)であった。

幕末、米沢藩は奥羽同盟軍の柱として官軍と戦ったが、つい利あらず降伏した。

## 甲 と 冑

宮坂考古館には56領の甲冑が所蔵されているが、このたび展覧に供したのは県指定文化財2領をふくむ6領である。いずれも質素にして堅牢、まさに実戦に備えたもので、米沢藩の特色を遺憾なくあらわしている。

このうち、本小札紺糸威銅丸(県文)は、5代藩主上杉綱憲所用と伝えられているが、その製作は元龜・天正時代にさかのぼるもので、桃山時代の様式を示し、技法上とくに優れたものであるといわれる。

また、浅葱糸威錆色塗切付札二枚胴具足(県文)は、上杉氏の名将直江兼統が着用したものと伝えられ、桃山時代のもので文祿・慶長のころの製作とされている。つくりは専ら実用的にして、全く華美に流れる点はなく、当時の特色をよくあらわしている。兼統は謙信・景勝の2代につかえ、文武両道を兼備した名将で、米沢城の縄張り、城下の町割を行なった部将である。

素懸紫糸威朱塗五枚胴具足は、上杉藩客将前田慶次所用の具足といわれる。同様の具足が川西町掬粋巧芸館にも所蔵されている。

黒塗二枚胴色々威具足は上杉家代々の当主の着初式に着用したものとされる。

黒塗黒糸威腹巻もまた子ども用のものである。

## 馬 具

鞍・鎧・佐登かけ・あほり革・胸飾りなど組合わせ、馬具一式として示したものである。

## 屏 風

龍の図および虎の図の銀屏風は、ともに狩野元信筆と伝えられ、謙信公が陣中にて用いたといわれる。江戸城および大名屋敷割図は、江戸城を中心に諸大名の屋敷割を克明に描いたもので、その全貌をうかがうる貴重な屏風である。上杉家の屋敷が「御上様」とある点からみて、上杉藩の絵師が描いたものか、または、他藩の絵師に描かせたものであろう。

最上川川筋の図は、最上川最上流の河岸糠野目から米沢藩の米蔵のある左沢までの川筋を描いた絵図である。米沢藩の米・青宇などの多くは糠野目や長井の宮、荒砥などから舟に積み、黒滝の難所を下し、左沢河岸に陸揚げし、蔵に収めた。ここから酒田までは、さらに大きな舟で下した。

最上川川筋の図は他にもみられるが、これらは一枚ものが、絵巻物風のものであり、本資料の如く屏風に描かれているのは珍らしい。図は屏風を3段に分ち、上流部から次第に下流部に至っている。

この図によって、流れのどこに瀬があり 淵があるかを知ることが出来、舟運の安全をはかることができた。さらに川に対して、領

内の村々がどのように広がっているかをも示しており、当時としては全く実用的なものであった。古泉斎筆とあるが、詳しくは不明である。

## 米沢藩稲富流砲術

米沢藩の鉄砲のはじめは、謙信公の越後春日山時代、唐人式部秀政を招き、その伝授をうけたことであるという。永祿4年(1561)の川中島合戦には、部将齋藤朝信が鉄砲隊を卒いて、大いに武田方をなやましたことが知られている。

名将直江兼統は、このあとをうけて鋭意その改良につとめた。すなわち5匁筒を改め、大型化をはかって、慶長9年(1604)江州国友村から吉川惣兵衛、泉州堺から泉谷松右エ門を招いて、吾妻山中にて、極秘のうちに鍛造せしめたという。この秘密をまもるため、鉄砲奉行をして監視させ、その地域に入るものは断罪に処した。

このころ、砲術の流派は200余あったが、いまに伝えられているのは、森重流・陽流・稲富流の3流のみである。稲富流は京都の稲富祐直が開いたものであるが、景勝は家臣稲富伊賀守を遣わして、これを学ばせた。この後、直江兼統に仕えた大熊信次が、この流を盛んにし、大筒鉄砲組頭に任ぜられたという。

米沢稲富流は「米沢の雷筒」として恐れられ、明治戊辰の戦争には遺憾なくその威力を発揮した。

## 槍

12本の槍は、上杉家十二槍とよばれる 同家重代の 槍で、関東管領上杉憲政から贈られたものと伝えている。上杉氏の出陣の式である武てい式には、この槍が用いられるのが例であるという。

## 陣羽織・胴着

上杉憲公着用の陣羽織は、文久3年2月、公の上洛の折、孝明天皇から拝領した錦地で作ったもので、まことに美しいものである。胴着は謙信公が陣中にて野宿の際、冑の上から着用したものと伝えられる。

## 旗

毘の字の旗は、謙信公が自らの守り神として深く信仰した毘沙門天にちなむものである。この旗は世の中の一切の魔を払うことをあらわしているという。

龍の字の旗は、毘の字の旗と対になるもので、この旗が高く掲げられたときは、全軍総攻撃の合図であるという。

赤地十六弁菊花御紋旗は、戊辰戦争のとき官軍から拝領した軍旗と伝えられている。戊辰戦争東北連合軍旗は、激しく揺れ動いた郷土の歴史を物語るものである。